



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2001.1 第2号

年頭のごあいさつ

日本SPF豚協会 会長 赤池 洋二

あけましておめでとうございます。

我が国の養豚界は飼養農家戸数が年々大幅に減少するなか、飼養頭数は微減にとどまっておりますが、これは経営の大型化が継続して進行していることを示しています。

このような傾向にあって、会員各位の努力によってSPF豚農場数の減少はほとんどみられず、現状維持もしくは微増の傾向が続くものと思われま

す。一方、昨年は口蹄疫の突然の発生が我が国の畜産界を震撼させましたが、南九州と北海道の一部に限局したのみで大事に至らなかったことは不幸中の幸いでした。これはひとえに我が国における防疫システムが有効に作動したことによるものであらうと思われま

す。我々のSPF養豚では、これらの防疫システムの上さらに高度でより緻密な防疫の仕組みを構築していると自負しておりますが、これは個々のSPF豚農場が防疫設備および防疫管理基準の根底にあるものを十分理解し、確実に実行することによってのみ機能するものであることを肝に銘じておかなければなりません。

最近、SPF豚農場認定業務を通じて感じられる懸念は、清浄度が低下しつつあると断定せざるを得ない

農場がいくつか目につくようになってきたことです。今のうちに何らかの対策を講じてこの懸念を払拭し、将来の発展の基礎を固めることができるよう会員各位のご協力をお願い致します。

21世紀を迎え、いままで以上の努力によって、より確実なSPF養豚技術の集大成をなし遂げ、消費者に対して、より安全で、より高品質の豚肉を供給できる体制づくりと、その拠りどころとなるSPF養豚の確固たる基盤を築きあげることを会員の皆様とともに誓いたいと思います。

日本SPF豚協会では昨年10月、この『日本SPF豚協会だより』を創刊しました。今年これをさらに充実したものに育てるべくスタッフ一同努力を重ねていきますのでご期待下さい。

また、今年3月に九州で、夏には北海道(予定)でSPF養豚セミナーを開催する予定です。会員はもとより、その従業員や家族、さらにはバイヤー、消費者などにも門戸を開き、SPF豚に対する理解を深めていきたいと思

います。養豚業界の厳しい環境のなか、会員各位のご努力と益々のご発展を祈念して新年のごあいさつと致します。

SPF養豚のはじまり

②

1960年代前半はランドレース種を主体とする純粋種飼育の全盛期で、疾病に対する抵抗力が弱く、マイコプラズマ肺炎や萎縮性鼻炎が猛威をふるい、つづいて豚赤痢が蔓延した。当時はまだ病原体が特定されておらず、マクロライド系抗生物質などによる対症療法しかなかった。また薬剤使用規制がほとんどなかったため、大量の薬剤が使用された。このような環境のもと、信籐博士のSPF養豚に関する紹介記事をヒントに、農林省家畜衛生試験場の波岡茂郎博士(当時)は我が国独自のSPF養豚の開発研究に着手することを決意し、1963年(昭38)、場内に柴田重孝博士を長とするSPF豚研究班を組織した。



研究会から

日本S P F豚研究会会長
山本 孝史

私が子どもの頃は、戦後の焼け跡があちこちに残り、空き地となっているところが少なくありませんでした。そこは三角ベースをやるには格好の場所であり、学校から帰ってカバンを置くなり飛び出して行ったものでした。そのときから疑問に思ってきたことがあります。それは、ストライクは「打つ」という意味だからわかるのですが、なぜ「ボール」というのか、ということでした。この50年にわたる疑問が、最近『ベースボールと日本野球』という本を読んで氷解しました。

この本によると野球の原点は、まさに三角ベースに似たタウンボールにあり、タウンボールでは投手は打者が打ちやすいボールを投げなくてはいけないそうです。そして、打ちやすいボールが続けて来ているのに打たない打者に対して「いいかげんで打てよ」という意味で「strike」と叫び、逆に打てそうもないボールが続いたときに「きたないぞ！そんな球じゃ打てないじゃないか」という意味で「unfair ball」（不正球）と叫んだのだそうです。これがストライクとボールの語源だということです。野球の原点は「打つこと：攻撃」にあることを示すものだと思います。

一方、日本では戦争中、敵の言葉は使うなということで、ストライクは「ヨシ」、ボールは「ダメ」といったそうですが、その視点は投手、すなわち守備側にあります。米国から野球が伝わり普及する過程で日本独自の守備を中心とした野球が発達したものと思われます。私はノースリーなら次の球は何か何でも見逃さなければいけない日本野球より、たとえ凡打に終わっても積極的に打っていくメジャー野球の方が好きですので、いいかげんに日本野球も原点に返って攻撃中心になってもらいたいと思っていますが、所詮はたかか野球のことです。

しかし、原点を忘れたばかりにとんでもないことが起きることもあります。旧聞に属しますが、某乳業乳製品のブドウ球菌エンテロトキシン汚染事件です。関係者にはお気の毒ですが私たちはこの事件から多くのことが学べると思います。誰もが疑問に思うのは、HACCP認

定工場でなぜこのような製品が生産されたかということです。HACCPは、危害分析重要管理点方式と訳される食品製造過程の衛生管理方式のことで、NASA（米国航空宇宙局）から宇宙食の製造を請け負った米国のギレスピー社という会社によって開発されました。

宇宙食には万が一の不良品もあってはいけません。どうすれば100%の安全性が保証されるのかということから、原材料から最終製品にいたる過程で起こりうる危険性(危害)を分析して、どの段階で起こりうるのか整理し、常に監視しつつこれらの過程をすべて記録に残すという一連のシステムがHACCP方式です。したがってこの方式で生産された食品には万に一つの不良品も出ないはずなのです。しかし、いくら完璧なシステムでもそれを遵守しなければ画餅にすぎません。同社は認定取得後に製造ラインを変更していたそうですが、このようなことは、HACCPの原点を全く理解せず、営業上有利だからとしか考えていなかったといわざるを得ません。

一方、某ハム製造会社が、自社製品からO157が分離されたという某県保健所の検査結果に対し「我が社はHACCPの認定を取得し、そのマニュアル通りに製造しており、記録には全く異常は認められていないのだからO157など検出されるはずがない」と主張したことから厚生省が調査、検査ミスであることが明らかになったという事件がありました。この場合は、「何のためのHACCPか」という原点を理解していたおかげで、ぬれ衣を晴らすことができたわけです。

翻って、S P F豚の原点とは何でしょうか。申すまでもなく可能な限り疾病を排除した豚のことです。特定病原体のみが不在であればよいのではなく、可能な限り疾病を排除するというのが原点です。疾病を排除する目的は、S P F豚が初めて誕生した頃は生産性向上のみであったかも知れませんが、これからは安全な豚肉の供給を加えなければなりません。したがって排除する病原体も、生産性に影響がなくても安全な豚肉を阻害するものであればどんどん追加していかなければなりません。

日本S P F豚研究会は、S P F豚の原点をめざす生産者の方々のお役に立てるよう、微力ではありますが懸命に努力して参りたいと思います。

21世紀は「S P Fにあらざるば豚肉にあらざる」が常識となるよう、ともにがんばりましょう。

萎縮性鼻炎 (AR)

全農家畜衛生研究所 浅井 鉄夫

S P F豚の対象疾病には、生産性に影響を与える5つの疾病(オーエスキー病、豚赤痢(SD)、トキソプラズマ病、萎縮性鼻炎(AR)、豚マイコプラズマ肺炎(MPS))が含まれています。今回は、ARについて紹介します。

ARは、空気をろ過する役目をしている鼻の中にある渦巻き状のフィルター(鼻甲介)がなくなる(萎縮する)病気です。そのため、ほこりや細菌などがろ過されなまま、肺の中に入ってしまい、肺炎に罹り易くなり、発育が停滞します。症状は、くしゃみ、アイパッチ(目ヤニ)からはじまり、重篤になるにつれて、鼻血や鼻曲がりを引き起こします。

ARの原因菌は、ボルデテラ・ブロンキセプチカ(ボルデテラ)とパスツレラ・マルトシダ(パスツレラ)です。特に、パスツレラには、毒素を産生するものと産生しない株があり、産生する株によってARが引き起こされます。

発症の程度は、農場の衛生状態、衛生対策の実施状況と大きく関係します。

現在、ボルデテラやパスツレラに対する単味ワクチンと両者を混合したワクチンが市販されています。混合ワクチンを使用すれば、汚染菌の種類を考慮する必要がありませんが、単味ワクチンに比べ衛生費の増高につながります。ワクチンを選定するにあたっては、自農場の汚染状況、自農場で発病しているARが、ボルデテラやパスツレラの単独感染なのか、混合感染なのかを、十分把握することが大切です。

軽度のARは、母豚へのボルデテラ不活化ワクチンの注射で、十分な効果が得られます。これは、母豚にワクチン注射することで、母豚の血液中の抗体を引き上げて、初乳を通じて子豚に移行抗体を獲得させて感染を防御する方法です。

しかし、重度に発病してしまう農場では、母豚へのワクチン注射だけでなく、子豚へのワクチネーションや抗生物質の投与が必要になります。

また、抗生物質を子豚に注射(あるいは、鼻腔内噴霧)する場合、ARの発生状況によっては、哺乳中に3-4回投与しなければならないため、ワクチン注射に比べ作業回数が増加します。農場内の汚染菌の薬剤に対する感受性も考慮する必要があります。そして、幅広い効果をもつ薬剤を使用すれば、肺炎や下痢などといった他の疾病に対する予防対策を兼ねることができます。しかし、抗生物質を継続的に使用していく場合、耐性菌が出現してしまうため、定期的に細菌の薬剤感受性を調べておく必要もあります。

最後に、ARの発病の重篤度には、哺乳中の子豚の衛生状況が大きく関わっています。哺乳中に重度な下痢をした子豚では、症状が強くなる場合があります。AR対策の一つとして、「下痢をさせない」また「下痢を見つけた場合、早期に治療する」といったことが重要です。呼吸器症状を併発しているため、十分な湿度を与え、ほこりっぽい空気をできるだけ豚に吸わせないようにしてやることや、冬場には、保湿と同時に、冷たい空気を吸わせないようにすることも重要ですが、換気不良にならないよう注意しなければなりません。

また、不幸にも発病した場合、重度に発病した豚は、一年近く飼育しても出荷体重に到達しません。重篤な症状の豚は、見切り出荷をする必要があります。また、このような重度なAR症状が発生する農場では、パスツレラによって引き起こされていることが多いことが知られています。パスツレラを意識した対策を実施していないなら、ARに対する衛生対策を再検討することが必要となります。

人工授精(AI)でゆとりの繁殖を——①

伊藤忠飼料(株)研究所 鈴木 保

なぜ人工授精は増えているのでしょうか

ここ数年、国内の精液販売会社も増え、雑誌での広告も目に付くようになりました。また海外の展示会でも人工授精器具で溢れかえっています。それだけ世界的に普及している証拠でしょう。遅まきながら我が日本も大規模一貫経営農場を中心に急速に増えつつあります。では何故そんなに増えているのでしょうか。

まず、種付けにかかる作業時間が極端に短くできます。これは種付け頭数が多くなればなるほど有利です。次に作業が安全です。雄を扱うわけでもなく、母豚をストールから出す必要もないのですから当然のことでしょう。最近若い女性労働が増加していますのでこれは大きいメリットです。さらに自家採精の場合、交配にかかるコストが安いことです。最後に生産成績が上がることです。これは意外に思われる方が多いと思いますのでのちほど理由を説明しましょう。

人工授精は簡単で難しい

人工授精を今までにやったことがある養豚家は多いでしょうが、継続している人は少ないでしょう。それは作業の一见簡便さから、あまりにも軽率な取り入れ方をするからです。

確かに人工授精とは精液を雌豚に注入するだけのことです。ですから単純です。その意味では人工授精は簡単といえます。しかし3～4のポイントを守るか否かが成否の分かれ道となります。そしてそのポイントも本来当たり前のことなのです。

成功への4つのポイント

私も当初強引に人工授精を始めた時、失敗の連続でした。しかし理解ある上司と優秀なスタッフのおかげで克服しました。当時はまだ大規模に人工授精を取り入れている所はなく、成功の秘訣など教わることもできませんでしたが、今は成功事例は山ほどあり、まずは成功者が

らしっかり教わることです。これが究極の秘訣でしょう。私が考えるポイントは

- ・ 注入する際に精液の性状を確認する
- ・ 精液は体温に温めてから注入する
- ・ 精液は無理に早く注入しない
- ・ 注入前後に雄豚で雌を刺激する

もちろんこれら以外に温度ショックや衛生に配慮することは当然です。いずれもとても簡単で一見当たり前のことです。しかしこれらを確実にされている方は何人おられるでしょう？

秘訣を達成する具体的な方法

では実際にどうすればよいのでしょうか。まず精液を検査するのは顕微鏡で観るしかありません。採取後5日以内の精液であれば活力を確認する(悪いもの—プラス3が40%以下、は絶対使用しない)だけで充分でしょう。

次に精液を加温するのは、少しぬるめのお風呂(水温計で39℃以上にならないよう要注意)に10分程度浸しておけば充分。ただ取り出してから注入するまでに時間を掛け過ぎて冷やさないようにします。精液の加温の是非については賛否両論ですが、試して損はないでしょう。

そして注入の際最も重要な点ですが、手で持って1頭ずつ丁寧に時間をかけて注入するのは至難の技です。数十頭も控えていればなおさらです。

そこで写真のように一般の使い捨てカテーテルを用いて、半自動的に注入するよう工夫しました。ガムテープ一つあればできます。ただ精液チューブが硬質のものはできません。この方法だと一人で20頭以上でも楽に自然に注入可能です。ただしストールの尻止めの形状によっては外れる危険性があります。この方法も以前逆境の際スタッフが開発してくれたものです。

最後に雄による刺激ですが、これは豚舎構造が大きく

起因します。雌ストールの前方が通路になっていれば、注入中雄を通路で遊ばせるだけで済みます。後方にしか通路がない場合は、注入の前後（どちらかでもよい）に雄をゆっくり歩かせるだけでよいのです。こ



れは想像以上に効果絶大です。どちらも不可能な場合は、雄の臭い（体臭・尿臭）を布に染み込ませて雌の鼻先に吊すことで対応できます。

繁殖成績は本当に良くなるのか？

基本的に繁殖は、きちっとやるべきことを守っているか否かで決まります。自然交配で繁殖性が悪い農場が、人工授精で良くなるかといえばノーでしょう。ただし人工授精に切り替えることで作業を一から見直し、より機械的に作業ローテーションに組み入れることができます。

飼養規模の拡大に伴いローテーションシステム（オールイン・オールアウトがベスト）は不可欠ですが、その際繁殖の作業性が最もネックになります。人工授精の作業効率は結果的に成績を上げることにつながります。それは精液性状や雌豚の発情確認など、一連の人工授精作業の中で以前の自然交配よりも結果的に豚の観察機会が増えることになるからです。

今回は注入する際のポイントでしたが、次回は採取側のポイントについてお話ししたいと思います。

● 認定情報 ●

● 平成12年度認定農場

[12月認定] (有効期間：平成12年12月7日から13年12月末日まで)
北海道・(有)アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)ゲズント農場、(有)宇佐美農場、(有)中多寄農場、(有)道南アグロ、**青森県**・(有)ふなばやし農産、神明畜産(株)八戸ファーム、**岩手県**・岩手県経済連種豚センター本場、(有)ケイアイファウム玉山農場、S P Fスワイン斉藤、(有)胆沢養豚、カワムラS P Fファーム、(有)鶯S P Fセンター、**秋田県**・(有)ポーランド、(株)ユキザワ、**山形県**・(有)最上川ファーム、**宮城県**・(農)しわひめスワイン、(有)嶋崎種豚場、**福島県**・(有)矢吹ファーム、神明畜産(株)川内ファーム、**茨城県**・全農養豚実験農場岩間農場、(有)山西牧場、(有)常陸牧場、(有)クロスファーム

群馬県・(有)長谷井畜産、ピックファームゴカン、(有)タカハシファーム、**千葉県**・実川養豚、木内養豚場、(有)清水養豚、綱島養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)ブライトピック千葉、(有)菅井物産S P F農場、(株)ホソヤミート直営養豚場、**長野県**・(有)ヤマイチ養豚場、**静岡県**・富士畜産(有)大河内農場、**岡山県**・(有)ジェイエイ畜産吉備農場、**愛媛県**・(株)愛媛ハイピュア大川農場、(株)愛媛ハイピュア丹原農場、**大分県**・大分県経済連ハイコープS P F豚F1供給農場、**長崎県**・(有)芳寿牧場、**熊本県**・(有)高森農場 (有効期間：平成13年9月30日まで) (以上45農場)

※次回認定委員会は平成13年3月15日(木)の予定

● S P F 豚研究会から ●

● 研究会を開催

平成12年11月15日、東京大学農学部弥生講堂において日本S P F豚研究会(山本孝史会長)の主催による研究会が盛大に開催されました。

内容は会長あいさつにつづいて

1. 豚のサルモネラ症について
農林水産省家畜衛生試験場 山本 孝史 氏
2. 日本S P F豚研究会年次報告
日本S P F豚協会々長 赤池 洋二 氏
3. 衛生検査の立場から見た最近の疾病動向
日清製粉(株)検査センター 矢原 芳博 氏
4. 認定農場紹介

(有)クリーンポーク豊丘 松下 敏文 氏

以上4題の発表が行われ、活発な議論が展開されました。研究会終了後、東京大学山上会館において賑やかに懇親会が催され、斯界の先生方や専門家、生産者などが酒杯を傾けながら、活発ななかにも和やかな談笑のひとときを過ごすことができました。

来年は5月に開催される予定になっています。協会の会員で研究会会員になっていない方は、ぜひ研究会に入会(年会費2,000円)の上、出席されるようお奨めします。

[入会申込先]

栃木県黒磯市青木919 伊藤忠飼料(株)研究所内

・日本S P F豚研究会事務局 (TEL 0287-64-3657)

本物のSPF豚を選んでもらうために

ホクレン農業協同組合連合会
畜産販売部ポーク課

大久保 真

ホクレンがSPF豚肉の差別化販売に取り組んでから、もう6年になります。ホクレンでは「おいしさと安心」を旗印に、開始当初から協会の認定マークを折り込んだプライベートシールを肉のパックに貼付して、日本SPF豚協会認定のSPF豚肉であることを消費者にアピールしてきました。昨年4月から11月までのシールの発行枚数は230万枚程度になります。

また、同時に店頭で認定マークと認定制度を示したパネルを掲示したり、レシピブックやテレビ・ラジオ番組、CMなどで協会や認定農場の紹介を行ってきました。流通関係者や販売店、消費者の方々を招いてSPF豚肉の試食求評会や料理コンテストも実施しました。その甲斐もあってか、ホクレンの調査では、札幌市の一般消費者の「SPF豚肉」認知度は6割以上に上ります。

ところが、最近消費者の方々と懇談の中で次のような会話をすることがありました。

消費者A「ホクレンさん、SPFはほんとにおいしいですね。お肉がとってもやわらかいし」

消費者B「しゃぶしゃぶとか、うちの子もたちたくさん食べるんですよ」

消費者C「豚くさくないし、うちの主人もファンなんです」

大久保「そうですか、ありがとうございます。いつもどちらで買われますか？」

消費者C「〇〇マートです」

大久保「えっ？そこにはSPFは入っていませんよ」

消費者C「ええっ！？でもパックにはSPFと書いたシールを貼ってますよ」

大久保「そのシールには認定の黄色い子豚のマークが入っていますか？」

消費者C「いえ、入ってないです」

ホクレンは北海道でさまざまな場面で啓発活動を行ってきたつもりだったのですが、このように認定マークがなくとも「SPF」の表示なりシールが貼ってあると意外とそれを鵜呑みにしている場合が多いことに気づいたのです。

また、後で調べてみると、その消費者の買われた肉は動物性蛋白質を抜いた飼料で肥育した豚肉であることがわかりました。たしかに豚くさは抑えられています。

しかし、それはSPF豚肉とは似ても似つかぬものです。

北海道でもそうですが、SPF豚が認知されるに従い、店頭で自称SPF豚を見かける機会が多くなりました。おそらく東京では、近所のスーパーを数軒回るとどこでもSPFの表示を眼にすることができるとは思いません。しかし、そのほとんど、いや全くといっていいくらい認定マークに出会うことはないのではないのでしょうか。

消費者の方々はおそらく表示されているSPFを疑うことなく買われているのですが、このような状況では、せつかく協会が苦勞してつくり多くの関係者が関わって運用している認定制度も、生産者が細心の注意を払いながら維持している認定農場の指定も、肉の販売の場面ではいつまでたっても日の目をみることはできませんし、認定農場産のSPF豚肉が消費者に正当な評価を受ける土俵さえつくれません。

豚肉の供給者として、消費者へおいしさと安心を提供しながら原価を少しでも安く仕上げることはもちろん大切なことですが、輸入ポークが増加している中で、継続的に安定した量を販売する仕組みもしっかりとつくっていかねばなりません。そのためには、認定農場産として消費者に認知される売り方の工夫と、認定マークが信頼のブランドとして価値あるものと消費者に認められるような情報の発信が必要です。そしてそれは販売する人だけがやればよいというものではなく、生産している人も率先して販売者と連携し行動していかなければ、なかなか実につながってこないのではないかと思います。

私は協会と会員の皆さんによりこの行動が全国的な広がりとなってくれば、ゆくゆくは法的な整備につながる環境を形成できるのではないかと考えています。

流通関係者の中には「もうSPFで売る時代は終わった」という人がいるようですが、ホクレンはSPF豚肉がそのような一過性の流行商品だとはまったく考えていません。国産豚肉と輸入ポークのすみわけはこれからも進むでしょうが、国産豚肉が売り場をしっかりと確保していなければ、輸入ポークのシェアは一方向的に拡大することも予測されます。

SPF豚は、それを阻止することのできる商品力と可能性を持った豚肉なのです。

● 協会からのお知らせ ●

養豚セミナーを3月に宮崎で開催

前号でお知らせしました養豚セミナーを下記のとおり開催することになりました。全国からどなたでもご参加いただけます。開催要項は次のとおりです。ぜひご参加下さい。

● セミナー

- *大会委員長 一守山実夫 (農)守山畜産理事長)
- *実行委員長 一森川 力
(株)九州ノーサンファーム取締役社長)

*開催場所 (シーガイア内)

ワールドコンベンションセンター「サミット」
宮崎市山崎町浜山 TEL(代)0985-21-1155

*日 時：平成 13 年 3 月 1 日 (木) 午後 1 時より

*参加費：無料

*プログラム：

1. 開会のあいさつ 13:00～13:10
2. これからの食肉処理-HACCPを前提とした食肉
処理の現場における取り組みー 13:10～14:10
川村 次男 氏 (南九州畜産興業専務取締役)
3. S P F 豚肉の差別化販売の実際 14:10～15:10
大久保 真 氏 (ホクレン畜産販売部ポーク課)
4. 休憩 15:10～15:30
5. パネルディスカッション
ー私の S P F 養豚ー 15:30～17:00
浦中 一雄 氏 (天草梅肉ポーク(株))
大和 建一 氏 (有)やまとんファーム)
東海林 弘 氏 (株)九州ノーサンファーム)
森田 幸二 氏 (ニッポンフィード(株))

● 懇親会(レセプション) 17:30～19:30

セミナー終了後、懇親会(レセプション)を開催します。

*どなたでも参加できます。

* 参加費：1 名 7,000 円

日本 S P F 豚協会会員および従業員には 1 人 2,000 円を補助します。

● 宿泊 (シーガイア内、セミナー会場隣のビル)

ホテルオーシャン45(全ての部屋が太平洋に面した



豪華な部屋です)。

宿泊料金 (朝食付き)

ツインまたはトリプル	1 名10,500円
シングルユース	1 名15,750円

● ゴルフ

翌日、隣接するフェニックスカントリークラブでゴルフコンペが行われます。参加自由ですが、人数に限りがありますのでお早めにお申し込下さい。(プレー料金は 20,000 円程度)

[申込方法] 同封の申し込み用紙にて F A X もしくは郵送にて協会事務局までお早めにお申し込み下さい。定員になり次第締め切らせていただきます。

[申込期限] 平成 13 年 1 月 31 日

交通のご案内



主要交通拠点からの所要時間 (車またはバス)

- 宮崎空港から 約 20 分
- 宮崎港から 約 5 分
- JR 宮崎駅から 約 15 分

※上記の場所からシーガイア行直行バス、およびシーガイア経由の路線バス(宮崎交通)が運行しております。

会員
プロフィール
紹介

愛媛ハイピュア
丹原農場
●愛媛県丹原町

愛媛ハイピュア丹原農場は、愛媛県東予地方、石鎚山系の裾野にあります。眼下に「ひうち灘」が一望でき、周辺は特産の「あたご柿」畑に囲まれた風光明媚な場所です。

現在の稼働母豚数約600頭、99年度の母豚1頭当たりの年間商品化頭数が24頭を着実に超えている、グループ内で最も優秀な農場の1つです。この成績は各従業員の意識の高さと責任感に裏打ちされていることはいまでもなく、月例の農場会でも各担当から「厳しい質問」が浴びせられます。

こうした姿勢は平井 勇場長の企業養豚に対する基本理念が全員の心に浸透している証拠です。それは「豚を育てるための3要素であるエサ・水・空気の大切さを毎日の管理における大原則とする」ことです。また年度当初に農場全体の生産目標を掲げ、この目標達成に対して各担当独自の案を検討させ「実行してみる」姿勢があります。このことは「やらされている」から「自分からやる」への意識変革の基本となっています。

また、場長は「権限委譲」が出来る数少ない経営者の一人であり、人材育成能力の高い方です。さらに経営に対しても貪欲で「経営の基本は利益を出すことと、安全で安心な食材を食卓へ届けること」といいます。

現在の従業員は7名、SPF豚を一貫生産しています。



丹原農場のスタッフ。
前列右端が平井場長

紅一点の西村さんは分娩舎の担当ですが、舎内全体の風向による育成率への影響や、餌付け時間の特徴を把握するなど「丹原農場の癖」を理解した上での飼養管理を実施し、着実な成果をあげています。また、離乳舎を担当している増子君は、離乳後の子豚管理について日々の観察をもとに「温度重視」から「換気重視」という独自のマニュアルを確立、本年度開場以来最高の成績をあげた一番の立て役者です。

丹原農場では、繁殖関連では97年度から2週ローテーションと人工授精を積極的に採用した結果、年間の分産率が90%にまで向上しました。また分産・離乳関連ではオールイン・オールアウトの導入、肥育関連では徹底したロット管理の定着を図っています。さらに、防暑対策として97年度に設備したクールセルパッドシステムにより、真夏の舎内温度が28℃以上に上昇することはなくなっただけでなく、豚が暑熱ストレスをほとんど感じずスクスクと大きく育ってくれています。

生産された豚肉は主に西日本地区と愛媛県内のスーパーを中心に「味」、「安全」、「高品質」、「安心」への高い評価を得ており、今後さらに拡大する予定です。

自分たちの育てた豚への自信と誇り、そしてSPF豚への「こだわり」を持ち「安心できる美味しい食品」の供給に努めている農場です。

(伊藤忠飼料(株)研究所西日本技術チーム・笠原 茂)

編集後記 あけましておめでとうございます。
新たな世紀のスタートに『協会だより』第2号をお届けすることができました。おかげさまで創刊号は各方面から好評をいただきましたが、今号は技術ページの連載開始や流通現場の声など、さらに充実した誌面になったのではと思っております。今後もわかりやすさ、読みやすさを目指しつつも、協会の会員であることに誇りを持っていただける、そんな内容のある誌面づくりに努力していきます。
また何といっても会員の皆さんの声を反映したものでありたいと思っております。ご意見、ご感想はもちろん協会への要望等何でも結構です。どしどし事務局までお寄せください。(輝)

日本SPF豚協会だより

第2号 2001年1月1日発行(季刊)
発行 日本SPF豚協会
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6
TEL.03-5283-5021 FAX.03-5283-5022
発行人 赤池 洋二
編集人 林 哲